

生の傍らにあるもの

鈴木千登世

『繭の木』は、『水の祈り』に続く朝比奈美子さんの第四歌集である。平成二十四年秋から令和二年春までの作品四一七首が収められている。

わが庭にふかく根を張る繭の木の梢照らし
て白き月あり

病棟に病む子は眠りみなづきのしろき月ゆ
く繭のこずゑを

表題となった繭の木は作者の家の庭に植えられた黒鉄繭の若木。その木を詠みこんだ作品が歌集の随所に置かれている。庭に深く根を張る繭の木に過ぎた時間は家族が積み重ねた時間でもある。高齢の親と療養中の子を抱え外出を控えていたこの時期の作者の傍らで静かに枝を伸ばし立っていた繭の木。あとがきには、四季折々の繭の木に「どれだけ励まされ、また慰められてきたかわかりません。」と記されている。

むらさきに腫れたる己が指に問ふわれにピ
アノと歌のある意味

予期せぬ怪我だろうか。痛む指を見つめ「なぜ弾くのか。なぜ詠むのか。」と自問する作者。音楽や歌が自己の生に欠

くことのできない存在であることを噛みしめているのではないだろうか。作者には「音楽」も「短歌」も繭の木のように、常に傍らにあり、拠り所となるものなのである。

その芯にあたたかな黒たたへたり歌作すと
持つ夜の鉛筆は

保護色はそらのみづいろ すこしなら詠ん
でいいのだココロの闇も

横顔がふいに真摯なものとなり歌詠む域に
入りてゆく友

短歌をモチーフとした歌から三首を引いた。苦しみや嘆き、秘めておきたい負の感情を受け止め、整え、癒やしてゆく三十一文字。葉師の心を持つものと作者自身も詠んでいる。短歌という器への信頼が感じられる一、二首目。鉛筆の芯の「あたたかな黒」はその象徴と捉えられる一方で「すこしなら」からは抱える苦の重さが覗く。集中にはまた「歌集、歌書あまた積まるる一角はきよらかにしてわれの空間」の歌があり、短歌に対する格別の思いが覗い知れる。見えない、見せない素の姿が現れるのも短歌で、歌の友はある意味家族よりも自

分の本性を知っている。三首目の友の真摯な表情への変化は歌を詠む者はよく知る変化。短歌という詩型や深い信頼と尊敬で結ばれた師、仲間との交流が生を支え寄り添う。

ちちのみの父はわたしの手を握り「楽しいことを話そう」と言ふ

文学好き、世間知らずのこの人のむすめなることが誇りなり

遺影なる父を見るときわが内をゆたかにすぎてゆく時間あり

介護の苦などは詠はぬほうがよし空がどんなに低くなるから

歌集後半には死や老いを見つめる作品が並んでいる。病む子を抱えて作者は父の老いや死に向き合い、二人の母の介護にあたる。抑制された言葉でそのさびしさや重い現実が描かれている。一首目、記憶を失いゆく父の、娘を気遣う仕種や言葉に父親の為人が見えてくる。作者を慈しみ惜しめない愛を注いだであろう父。文学を愛し世知に疎い父。二首目はその父の娘であることを「わが誇りなり」と断定する愛に胸を打たれる。三首目は慈しまれて過ごした日々の記憶が父の死の悲しみを包み、作者を満たしている。そして記憶の中に生きる父は幻や星の光に形を変えて作者を慰撫し続ける。四首目は義母の介護の一連の中の一節。父を見送った後には二人の母の介護が待っていた。介護を詠んでもその苦は歌にしないうという作者。苦を呑み込み引き受ける覚悟は先に挙げた「ココロの闇」の歌に通じる。

悲しくはないがときを寂しく指で文字書く「人」といふ文字

日なたよりさしのぞきつつ教室を直線多きところとおもふ

馬の尾の白き毛を張る弓が動き野風のごとく音生まれ出づ

心惹かれた歌から三首を引いた。どの歌も作者の個性や措辞の鮮やかさが感じられる。一首目の寂しさは誰かが側にいない寂しさではない。生の根源にある孤を生きる寂しさだろう。「悲しさ」「寂しさ」という平易な言葉を並べて深い内容が詠まれている。二首目は気づきの歌で、教室を「直線多きところ」と直感する独自の把握が印象的。確かにその通りなのだが「直線」と切り取られたとき、学校の持つ硬質な部分が日なたの明るさに対比されて浮かび上がる。三首目はバイオリンを奏でる行為を描写した作。馬と野風の取り合わせに詩的な広がり生まれ、調べも音楽性を帯びて美しい。作者の眼を通すと様々な行為や現象が詩として立ち現れる。

内省的で繊細な感性から生み出される朝比奈さんの作品の数々に立ち止まり、自分にとって生を支える存在は何だろうかと考えた。最後に趣の少し違う歌を紹介したい。

まつすぐに夫の男箸がのびてきてわが菜ひつつもち去られたり

ユーモアの溢れる一首。一瞬の沈黙の後に破顔する作者と夫君の表情が見えるようだ。家族と過ごす何気ない日常の温かさ。それを繭の木は傍らで見守っていることだろう。

暮しと地続きの山里

風 間 博 夫

本歌集は第一歌集。二〇一〇年から二〇二〇年までの作品と一九七一年から一九七四年までの作品十九首、合わせて四九九首を収める。宮里信輝選。あとがきに父祖からの田で米作りをしている奈良県南西部の金剛・葛城山麓の地を記念して歌集名としたとある。

集を通して、一首一首はねんごろに細やかに詠まれている。気取ったところはなく温かさが感じられる詠み口だ。緩やかに読み下すことができ、すとんと心に落ちる。

本歌集は五章からなる。第一章から三首引く。

① みはるかす大和三山春萌えて若からぬ身は
なにを恋ほしむ

② 園児らのファイトファイトがこだませり過
疎などあるなこの山里に

③ ゐのししのひづめの跡に透明のうすら水が
張るかがやきながら

④ は巻頭歌。作者が暮らすのは大和三山を遥かに見渡せる里。季節は春。若くない身は何を恋しく思うのだろう。本歌集の一首一首に答は秘められる。②、園児の声が今は木霊し

ているものの、山里に過疎が迫っている。「下校する子の集団を離れてわが集落へ至るは一人」という歌を章の最後に置く。③、猪の出る山里。蹄の跡に張る氷はかがやく。猪に心を寄せ、この里に共に生きる命として受け入れている。暮しは山里と地続きなのだ。

第二章の標題は歌集名となった「金剛葛城山麓日誌」。「四月」から「三月」まで十二月の小題に分ける。農作業に従事する作者ならではの輪旋だ。章のコアとなる田起こしから田植えまでの歌を引く。

④ 放置田の多きわが里元気なる水張田五枚が
月を映しぬ

⑤ 豆ごはん香りふつくら炊き上がり今日は靱
播きみんな集まれ

⑥ 代かきを終へしトラクター水たれて轍くつ
きり納屋へとつづく

④、「元気なる」が魅力。田起こしをした水張田の大切さを思う。水に映る月が美しい。⑤、靱播きは共同作業。「みんな集まれ」が力強い。⑥、代かきが終わりこのあと田植え

が行われるが、今日の作業は仕舞いのようだ。トラクターは汗を流し十分に働いた。

学術上、鳥谷口古墳が大津皇子の墓とされる

⑦ 田植機はチャブチャブチャブと水張り田の金剛山ゆらし苗を植ゑゆく

⑧ 田の神にあとは委ねて座布団にうたた寝しをりさなぶりの昼

⑨、今日は田植えの日。チャブチャブのオノマトペが楽しい。水に映る金剛山もゆれている。⑧、「さなぶり」は田植えを終えたことの祝い。心地よいうたた寝だ。植えてしまった苗の成長は神に委ねるしかない。

第三章から妻の手術の歌を二首引く。

⑩ ちちふさは女のいのちと言ひし妻けふ右の胸そこに刃を受く

⑪ 白南風にまろく転がる梅の実を拾ひ来て見す術後の妻に

⑨、「そこに刃を受く」のリアルさにどきりとする。手術は無事に成功した。⑩、梅の実の自然の力を妻に手渡す。白南風が爽やかだ。妻の病を受けとめる作者の強さを思う。

第四章で注目したのは大津皇子の一連。三首引く。

⑫ 鳴く鴨を今日のみと見て逝きし人ありしよわが立つここ国原に

⑬ 朱鳥元年天皇崩御していちにんの皇子に迫る肅清

⑭ 鳥谷口古墳に酒を供へつつこゑかけてみる「ともあれ呑もう」

⑫、大津皇子の辞世といわれる「ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ」(万葉集卷三四一六)を心に置いて歌われている。⑬、「朱鳥」は天武天皇の代の年号。「いちにん」は「肅清」とあり大津皇子。天皇が亡くなったあと、謀反を計画した疑いで自害させられた。⑭、皇子に寄せる思いを結句に述べる。皇子の墓は左註の通り。歴史に明るい作者と思つた。

最終の五章は「拾遺」。二十代半ばの習作期の作品。だが歌はしっかりしている。二首引く。

⑮ 四年間夜学に通ひし友の数三割となりぬ卒業の日は

⑯ 小さき手を固くにぎれるみどり児を湯あみさせをりはつなつの夕

⑭、夜学のときの作品。学を成就するのは三割。努力だけではどうにもならないことがある。⑮は子を得た時の歌。残しておくべき作品と思つた。歌集に収集するという作者の判断を喜びたい。上句の「固く」の具体がいい。下句、育児に参加していることが分かる。結句の「はつなつの夕」の爽やかさが作者を応援する。

最後に妻の歌を引いておきたい。

⑯ 桃の実のうすくれなるの皮をむく妻の小さき手乙女を残す

作者と共に農作業をする妻をほのぼのと詠む。乙女を残す妻の手が愛しい。

幽明のエトランゼ

池田恭子

エトランゼ。その環境に属さない者、外国からの旅人、異邦人。著者は文字通り異邦人として長く外地で暮らし子供たちを育ててきた。歌集を通して感じられる、哀調、美しさ、手を触れればさらさらと煌めいて消えてしまうような儚さ、それは寄つて立つ大地を持たぬエトランゼの視点のように思われる。

歌集はまず異国の風景から始まる。

異形いぎやうなるわれを怪しむリス猿が白オリーブの花散らしゆく

自らを異形と言うこの一首が巻頭歌なのは象徴的である。

合歡そよぐ煉瓦の路地の奥に見えモスクは

永久にわれを拒めり

洞ふかくひかり届かぬひとところ面輪艶め

く神々が笑む

イスラム文化圏に紛れ込んだ日本人の戸惑いが感じられる。しかし戸惑いつつも繊細な感受性をもって情景や文化を詠み綴る。そして彼の地に馴染んだ分だけ、日本を外から見る視点を持つ。

にほんごのやさしさ、冥さ折ふしに英語に
あらぬ棘がひそめり

単に国や環境に留まらない。著者は現世に生きるということにもエトランゼなのだ。生来病弱であり、今現在も難病を抱えているという。死は常に近くに親しくあるものだったのだろう。「執あはき」と自ら歌うように、生に対する執着は淡く、その視点は少し常人とは違い、どこか遠くを視ているようだ。ご両親は満州から引き揚げてこられたという。著者はその生の出発点から既にエトランゼであったのかもしれない。例えばこの一首。

骨片が月光浴ぶるかなしみに似てひそかなり
青磁の壺は

東南アジアのマレーシア在住中に詠まれたこの歌は、先の大戦の同胞の悲劇をも思わせる。青磁の壺を、月光を浴びる白骨に仮託して感じる「かなしみ」とは、また死すべき者としての己を常に意識しているからでもあるだろう。

暖房を止めて室温下がるとき死後硬直をおもふ、たまゆら

「たまゆら」とは一瞬のことだが、その前に読点が置かれている。下がっていく室温を感じた一瞬に、全ての日常を置き去りに自らの死後硬直を感じているということだろう。このように著者は常に生と死の境目に立っている。

心の臓病むは想定内のわれことし飛来の白鳥恋し

生来病弱であったという著者は、心臓を病んでいる上に「後頸靱帯骨化症」という難病を抱えている。「ある日ふと消えても仕方ない」という諦念ともいえる心情をもって生きている著者に、飛来する白鳥は美しく親しく思われるのだろう。須弥山へ航く舟ならむ中空に金色の柩のやうな三日月

中空の三日月を、須弥山に航く金色の柩と歌うその光景は現世を離れてひと際美しい。

しかしその著者を現世に留めおくものがある。二人の息子たちである。確かな生の側から読まれた一首。

七草粥子らと囲めばまもりたきいのちふたつを湯気がつつめり

母としての著者の姿、あたたかな家族の情景が浮かぶ。テロの話題避けつつ朝のティー注ぐサンデーエゴへ発つ出張の子に

国際人に育って息子たちは日本の枠を越えて生きている。どこにいても、離れていっても心を向けるそのことが著者の生の側に置く。そうした日常からはこんな歌も生みだされる。

冷蔵庫のチルドルームの片隅にちくわいつ

ぼんやさぐれてをり
確かな生活のひとこまがここには在る。

子育ての日々が終わり、息子たちはそれぞれに自分の道を歩いていく。著者の現在を象徴的に見せてくれる一首がある。

わが裡のふかくしづかな滑走路二機発ちゆきて夏草そよぐ

カールル・ギブランの詩「あなたの子どもは」(霜田静志訳)の一節、「弓を引くあなたの手にこそ喜びあれ」を思いだす。著者は子育ての最中にあっても、子らを我が物とは思っていない。束縛すること無く、押し付けること無く子育てするのは難しい。「ふかくしづかな滑走路」は著者の中に何にも代えがたいものとしてある。子供たちを詠んだ歌には深い愛情が滲んでいる。しかしその滑走路から、遙か遠くを目指して離陸する二機を見送り、そこにそよぐ夏草は清々しい。著者の「執あはき」特質は、美しく哀しく愛に満ちて表れている。著者の歌を特筆すべきものとしているものは、「エトランゼ」のまなざし、その美しさ、哀しさである。歌集のタイトルとなった一首。

理不尽な、そしてあまたの死を齎くかすみ
草あり天空の果て

理不尽な多くの死があふれている現代社会にあつて、著者が見上げる天空の果てとは、その怒りや悲しみややるせなさが尽きるころだろうか。そこに咲くかすみ草は著者の祈りであり、癒しである。そのなんと美しいことか。

著者の今後の御健詠をお祈りしたい。

中間色のトーン

吉 本 由 美

『草の輪舞曲（ロンド）』は小野はつねさんの第一歌集。コスモスに入会した二〇〇〇年から二〇二〇年までの作品、四九〇首を収める。あとがきに日本語の美しさ、豊かさに惹かれ短歌を始めたとあり、四十七歳の遅い出発とある。中年からの人生を小野さんの求める美しい言葉にのせて深い詩の世界を展開する。

まず、気がついたのは、父、母、夫、娘、伯母、義兄、大叔父、甥の家族や友、幼馴染、恩師との出来事の歌が多いことだ。

時守ときもりの漏刻博士今すこし長く刻めよ父の時
間を

ねたきりの母の頭上をめぐりある太陽、

月、星、風のモビール

残されし香水壺を水無月の光にかざせば傾
ける海

一首目、予期しない父の病であったようだ。父の入院が時の記念日であったことから運命を感じた作者。時刻を報ずることを司る陰陽陵の漏刻博士にすがり延命を祈る。二首目の

母を詠んだ歌は重い心情を窺うことができる。寝たきりの母を置き去りにしていく日々だが木々や草花を揺らす風のモビールによって救われた。太陽、月、星が暖かく慰藉しているようだ。三首目は亡き姉の使い残した香水に生きていた気配を感じ「傾ける海」に哀惜の情が滲む。肉親を亡くす悲しみを赤裸に表現しないのは優しさだろう。心の平静を保つ詠み方が姉を思う誠心さを感じる。静かに心の奥の翳りとなり大事に仕舞い悼むのだ。

傷みもつ水蜜桃をむくに似る思春期の子を
叱るといふは

ほろ酔ひほろよひの夫帰りきてわが前にひらくての

ひら蜜ひらみつひかる

一首目は傷のある水蜜桃と比喩された思春期の崩れそうな心を叱りつけてまた傷つけるかもしれないと思う母の心も痛いのだ。二首目のほろ酔いの夫と蜜の取合せが絶妙でロマンチック。蜜が両手に包み守って行きたい幸福の象徴のように。家庭を和ませる夫の存在は蜜の灯りのように優しい。家庭的

な温かさもひとつの特徴だろう。

次に日常を基盤とした多様で自由な比喩に注目した。

くれなゐの（あ）の字（あ）の字の落椿春

立つ朝の雨にぬれぬる

新しきノートをひらく冬の夜コウとひと声

白鳥が鳴く

「本日は売り切れしました」三百の（ぼうし

パン）飛ぶ町のゆふぐれ

一首目は「あ」の字の形容と椿の花の形容がぴったり合う。

まるでああと突然のことに戸惑い落ちてあゝあと溜息を付いているかのようだ。二首目の鳴いた白鳥は現実か、幻聴か、幻聴としたい。新しいノートの清潔な白紙のページを開いたときコウと鳴く白鳥と比喩して緊張感がある。三首目の売り切れだったことを残念がることなくパンが買われていった行方を街に飛ぶとした感覚が柔軟で愉快だ。椿、ノート、ぼうしパンといった名詞が実感を与え比喩の意外性や飛躍をすんなり受け入れることができる。聞こえない声を聞き、見えぬ物が見える。リアルとシニールが交差する研ぎ澄まされた感覚は詠むことに真摯な姿勢が作り出したのだ。

ひな人形明日は飾らむほつかりと百合根蒸

しゐる立春の宵

三角のちひさい手紙 スカートの秋草の種

子をつけて帰り来

落葉雨ふりつく午後のいちぐうに冬のには

ひの衣装箱ひらく

役立たずでしたとほのかな湿りおび「宛先

不明」の葉書もどり来

季節を肌感覚で捉える。一首目のひな人形と百合根が立春の宵を豊潤にする。二首目、三角の具体に小さい手紙の実感がある。三首目、冬の匂いとは敏感だ。暮らしからそこはかとなく漂う季節の雰囲気や掬い取る。四首目の「役立たずでした」という言い回しのうまさを付け加えたい。

『プラハの春』読み終へて聴く「モルダ

ウ」を水縹色の空へ届けむ

ゆであげて塩にぬれたるそら豆のビリジ

ン色の雨降りしきる

色彩感覚が豊かである。右の二首の歌の水縹色（みはなだいろ）は藍色の中間色でビリジアン色は緑色の中間色。この二つの色がカバーを涼やかに彩っている。感情を露わに表現しない精神世界は愛おしい人々、日常のあれこれや喜怒哀楽を柔らかい口調、語調で詠む。空、光、風、草木を介して比喩の不思議を自在に表現して詩的世界を綴る。濃くなくて淡くもない、重くもなく軽くもない水縹色やビリジアン色のように中間色のトーンの抒情は爽やかな光となっている。

きりん草コスモすすききりん草輪舞曲の

やうな田んぼいちまい

歌集名に採られた右の歌のように輪舞曲を奏でる快い歌集である。

野の花と家族

水上 美季

歌集『ひかりの花束』は、三木裕子さんの第一歌集である。

ため息はつかぬと決めたその日から空き瓶に咲くひかりの花束

タイトルになった歌だ。三木さんはあとがきで、「無造作に活けられた花の瓶には、山の空気やひかり、木の香り、そして、家族の笑顔も輝いているように見えました」と書く。

三十年近い年月が詠まれたこの歌集は、家族の軌跡を中心に描きつつ、光があればそこに影があり一筋縄ではいかない人生の深みを教えてくれる。

— スイトピー卓に飾りて夫を待つ白きエプロン
たまには着けて

みづひきの花ほどの嘘つきし子は嘘つく事
の苦さ知りそむ

一首目、結婚して数年経ったころだろうか。スイトピーと白いエプロンから幸せな家庭像とこれから歩む未来への希望が見える。(たまには)が甘くなりすぎずリアルで良い。二首目も同じ頃の歌。嘘は子ども成長の証ともいう。作者は娘の気持ちに寄り添い、子のつく嘘を水引の小さな花に喩え、

(嘘つく事の苦さ知りそむ)と詠む。

手をつなぐことなくなりし子と並びたんぼ
ぼの綿毛ふうつと吹けり

連絡の間遠になりて子の部屋のバクのぬひ
ぐるみ風邪を引きさう

子の歌は、ページを追うごとに成長が目に見えるように詠まれている。一首目、子が中学生くらいの歌だろう。たんぼぼの綿毛を吹く行為は寂しさを紛らわす行為に見える。綿毛が茎から飛び去っていく様子は、親離れしていく子のようでもある。二首目、前後の歌から、子は三十歳くらいと思われる。連絡の来ない子を思い、風邪を引きそうなのは作者なのだ。子を詠む歌はどれも愛情にあふれている。

集中には花の歌が非常に多い。なでしこ、なすな、いぬふぐり、みかんの花、十葉の花、鳳仙花、菜の花、水壘：数えきれないほどだ。歌に添えられているというより、花自体を詠んだ歌がほとんどで花が好きなのがわかる。

なづななづななづなの白く咲く道をなづな
の小花摘みつつ歩く

「なづな」を四回詠んで、なづなの景色を表現する。このなづなの花東も小瓶に飾られたのだろう。花に囲まれた暮らしをしているためか、歌集全体にほのかな芳香が流れる。

三木さんは長く医療の現場で働いていた。人の病氣と向きあう仕事は精神的にも肉体的にも大変だろう。そんな仕事を詠んだ歌でも包容力のある作者らしい歌が並ぶ。

しがみつく子を抱きしめて風疹の接種終は
ればじつとりと汗

怒りゐる医師にドンマイ　ひと呼吸おきて
次なる患者さんと呼ぶ

一日の調剤終へて分包器の掃除をすれば甘
き香のする

〈しがみつく子を抱きしめて〉(ドンマイ)〈甘き香〉などから作者のこまやかな心映えがわかる。これらの歌のほかに、おばあちゃんの愚痴を笑顔で聴く歌、医師への気遣いが感じられる歌など、人と人との繋がりの大切さを改めて思い出させてくれる。

穏やかに聞いても聞いても首をふる離婚の
理由は曖昧のまま

明日からの私は自由　その人を孤独と一緒
に待つ事もなし

一首目、もやもやと割り切れない思いが交錯しつつ、結論はきつぱりと存在する。二首目、孤独から自由になると詠む。自分に言い聞かせるような言切りが潔く、そこが逆説的に切なく響く。そして三木さんは新たな未来を進むことになる。

包丁の試し斬りなり大根をすばんすぱんと
黙つて切りぬ

〈すばんすぱん〉が軽く気持ちいい。しかし〈試し斬り〉と〈黙つて〉が意味深に響き合い、わだかまりを振り払おうとしているかのようだ。(たぶん誰も愛することなし一鉢の胡蝶蘭そしてめだかを育てる)という歌もあり、一人静かに穏やかな日々を送る決意をしている。しかしそうはならず、別れた夫と再会してやり直すことになる。

車より出でて眺むるオリオン座三つの星は
家族のごとし

この歌を、三木さんほどのような思いで詠んだのだろう。オリオン座を、おそらく家族三人で眺めていたのではないだろうか。何億光年前に放たれた光のゆらめきに、笑顔を向けて「私たちがみたいね」と言い合っていたかもしれない。

柔らかき手で両耳をふさがれたやうな静け
さ雪の降る夜は

秋雨にまゆみの朱実しづくしてスローモー
ション　ひかる球体

一首目、雪の降る夜を〈柔らかき手で両耳をふさがれたやうな〉という比喩で表す。二首目、まゆみの実とそこから落ちる雫がカタカナ書きの〈スローモーション〉で繋がって、一字空きでポタンと落ちたような工夫のある歌である。

この歌集を読めば、読者は改めて家族を思うのではないだろうか。